



## 蓬菜の玉の枝②



これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鉢を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬菜の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことがぎりなし。その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照り輝く木ども立てり。その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

### 現代語訳

これが私が探してた山だと（うれしいけれども）恐ろしくおもわれたので山の範囲をこぎまわらせ、二、三日様子を歩いてみて回っていると天人の服装をした女性が山の中から出てきて、銀のお椀をもって水をくんでいた。これを見た私は、船から降りて『この山の名前は何？』と尋ねたら、女性は『これは蓬菜の山です』と言いました。これを聞いて私はうれしくてたまりませんでした。その山は見てみると険しくて全く登りようがありません。その山の斜面の裾を回ってみるとこの世には見られない花の木々が立っています。金や銀や瑠璃色の水も山から流れてきます。その流れているところに様々な色の橋がかかっています。そしてその付近に光り輝く木々がたっています。そこでここに取ってきたのは、たいそう見劣りはするものでしたが、姫がおっしゃったものたちがつてはいけないと思いいこの枝を折ってまいってきたのです。

登るべきやうなし↓登りようがない

そばひら↓かたわら、そば、横の方

金鉢（かなまる）↓金属製のお椀

瑠璃色（るりいろ）↓瑠璃は宝石の一種。つやのある紫がかった紺色。